

成瀬の風

東成瀬村立東成瀬中学校
学校報：N034 作成者：伊藤
発行：令和3年1月22日(金)

東北電力・中学生作文コンクール 谷藤さん 優秀賞！

☆ 1月12日、東北電力は第46回中学生作文コンクールの入賞者を発表しました（応募総数は東北6県と新潟県の399校から1万6903点）。今回のテーマは『私の挑戦』・『私の成長』です。このコンクールで、谷藤さん（2年）が優秀賞に選ばれました。

三味線と共に

厳しい雪国の冬。前も見えないほど激しく吹き荒れる雪の景色がどこまでも広がっている。そんなイメージが浮かぶ津軽三味線の音色が、僕の体中に響き渡る。

僕の趣味は民謡だ。その中でも、伴奏楽器として使われる三味線が大好きだ。民謡を始めたのも「唄がわからないと三味線のよい演奏ができない。」と三味線教室の師匠に言われたのがきっかけだった。

三味線には長唄、津軽、地歌など様々な種類がある。その中で、僕が習っているのは津軽三味線だ。津軽三味線の特徴は他のものとは違い、打楽器の要素を持ち合わせているところにある。非常に激しい奏法のため、皮が破れないように犬皮を使用している。犬皮はひとつひとつ職人の手で皮張りがされるが、消耗が激しい。最近は技術の進歩により機械で張れる上に、長持ちする合成皮も出てきたが、それでも僕は犬皮の響きが気に入っている。こんな話をするとないていのは、変人扱いだ。けれど、僕は暇さえあれば三味線についての動画を見たり、情報を検索したりしている。

そんな僕には、20歳までに達成したい目標がある。それは、津軽三味線の本場、青森県で毎年5月に行われている「津軽三味線世界大会」に出場し、唄付伴奏A級部門で優勝することだ。

この大会は世界大会というだけあり、外国からの出場も年々増加している。昨年は、カリフォルニアで三味線を製作、販売、修理をしている方が来日し、出場したそうだ。本人は、13歳の時に三味線の音を聞き、魅力を感じ、自分で三味線を作るほど好きになったと動画で語っている。国境を越えて、これほどまで多くの人の心をとらえる三味線の魅力は語り尽くせない。また、僕が優勝を目指している部門の「唄付伴奏」は、三味線を単独で演奏するのではなく、その名の通り、唄の伴奏をするということだ。唄の伴奏はとても難しい。唄い手の癖、調子などを聞き分け、演奏中に合わせなければならないなど、教科書通りにはいかない難しさがある。さらに、五大民謡のひとつに数えられる津軽民謡はたくさんの種類があり、唄われた時代によっても様々な曲調がある。それを弾き分けるのも至難の業だ。

津軽三味線の名人と呼ばれた高橋竹山にはたくさんの名言がある。

「下手な三味線では誰も戸を開けてくんね。」「津軽三味線は耳の学問だ。」

という言葉もその一つである。確かに、人の心に届く演奏をするためにはどうしたらよいのか、様々な演奏を聴いて自分のものにしていくのは難しい。しかし、少しでも自分が求める音に近づいたときにはもっとうまくなりたいという気持ちがさらに湧いてくる。

僕の師匠は、津軽民謡の伴奏者ではなく、秋田民謡の伴奏者である。誰にも真似できない唯一無二の演奏だ。師匠が演奏する何とも言えない「間」や「音締め」は僕の心をとらえる。そんな師匠の音に少しでも近づけるように毎日の練習を欠かさない。多いときには一日中弾き続けることさえある。

しかし、大会の本番は練習通りにはいかない。それは、僕がこれまでに出場した三味線の大会からとも言えることだ。ある大会では、本番一時間前に演奏の要でもあるバチを折ってしまったのだ。すぐにバチを買い、本番には間に合ったが、バチを折ったショックと焦りで思うような演奏ができずに終わってしまった。悔しさだけが後に残ったが、それまでしっかりメンテナンスをしていなかった自分が悪い。その日からは三味線のメンテナンスを念入りにするようになった。このような失敗は、世界大会のときには絶対したくない。唄い手の方にも迷惑をかけてしまう。弾き三味線の名人と呼ばれた高橋竹山と叩き三味線の名人と呼ばれた木田林松栄。音源が残っているだけで貴重だと言われている。この方々の音を生で聞きたかったが、2人の音を再現できる奏者はいない。この方々の音源も参考にしながら僕は練習に励んでいる。また、津軽三味線世界大会での優勝という目標を叶えるために、練習法も工夫するように心がけている。まず、自分の演奏を録音し何度も聞き、分析し、失敗を生かすこと。そしてもう一つは、優勝者の演奏を聞き、違いを見つけて改善することだ。

僕にとって、津軽三味線と唄付けは、生活の大部分を占めている。現在の目標は世界大会の優勝だが、優勝で満足するのではなく、自分の音楽や三味線の演奏の幅を広げていきたいと考えている。さらに、僕の演奏を聴いて笑顔になってくれる人がいればなおさら嬉しい。

今日もまた、理想の響きを求めて芸を磨いていく。